

世界とつながり 未来を拓く 鳥取グローバル人。

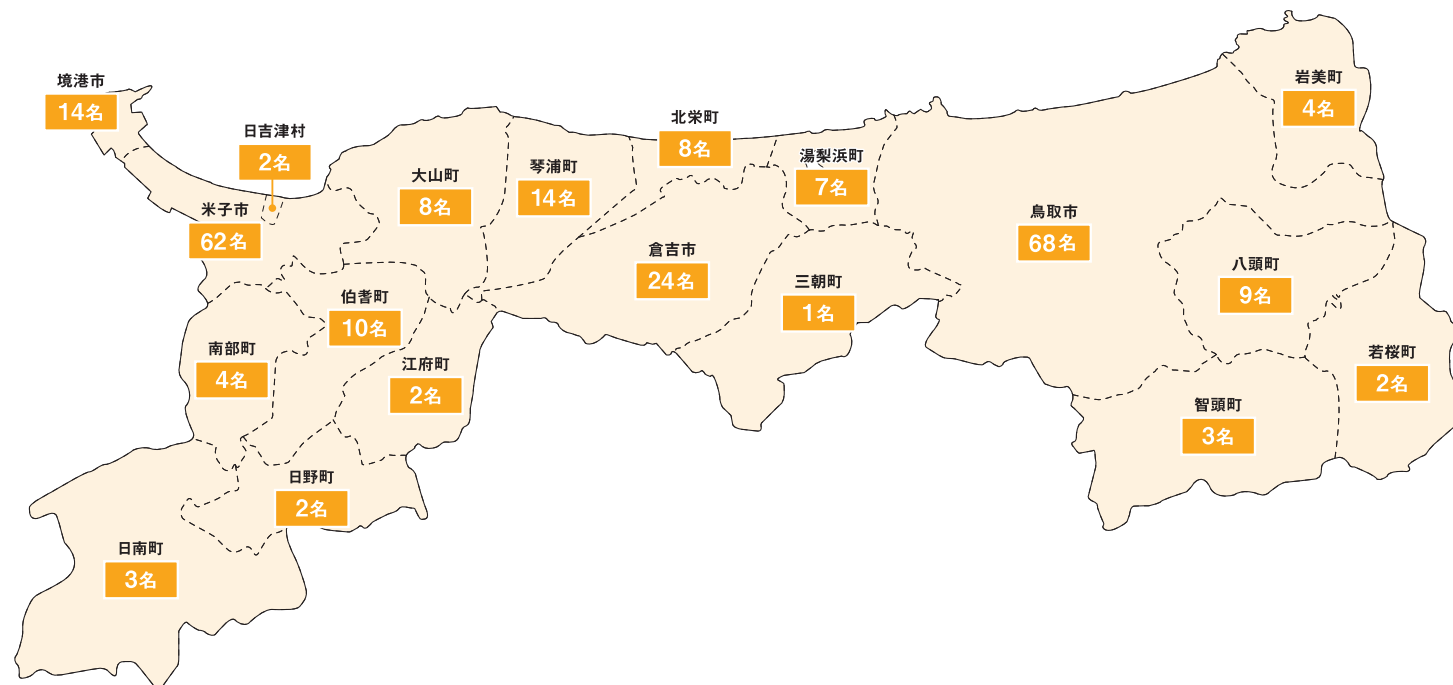
世界を元気にした人は、
日本も元気にできる！

今度は地域を、もっと元気に

鳥取県から青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊に参加した人は270人を超えました。

今、鳥取県では、青年海外協力隊として活動後、この地域を元気にしようと、さまざまな場所でその力を発揮している人たちがいます。

《 鳥取県 青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊 派遣数 》



※市町村の人数は2019年2月末時点のボランティア出発前表敬者数、本文中の人数はデータベースの出身県に基づく派遣実績数となります。

節水型農業を途上国で事業化し
地球環境を改善して次世代へ

No.01

鳥取再資源化研究所
国際事業部

狩野 直之さん
かのう なおゆき

▼派遣国



モロッコ

▼職種

コミュニティ開発



世界が近づいて視野が広がった
だからこそ身近な人に思いやりを

No.02

鳥取県立米子東高等学校
教諭

庄原 裕美さん
しょう ばら ゆみ

▼派遣国



インド

▼職種

日本語教育



子どもたちが主体的に学び
魂が躍るものをつかんでほしい

No.03

新田サドベリースクール
スタッフ

長谷 洋介さん
はせ ようすけ

▼派遣国



フィリピン

▼職種

理数科教師



アフリカンミュージックで
日本を元気にしていきたい

No.04

ギニア音楽演奏者

ジュバテ 麻子さん
じゅ ば て あさ こ

▼派遣国



ジンバブエ

▼職種

青少年活動



地球環境を改善して次世代へ 節水型農業を途上国で事業化し

鳥取再資源化研究所
国際事業部

No.01 狩野 直之さん
かのう なお ゆき

東京都出身。大学生のときバックパッカーとして東南アジアを中心に20カ国超を巡る。卒業後は一般企業に入社、広告部門へ配属。約3年後、「開発途上国での仕事や生活に挑戦したい」という夢を叶えるため、協力隊の説明会に参加。モロッコへ赴任し、水産普及センターでの業務に携わる傍ら、地域で識字教育にも関わる。帰国後、現職。

▼派遣国



モロッコ

▼配属先

ララシュ水産技術学院

▼職種

コミュニティ開発

▼活動内容

水産技術学院内の全国水産普及センターでWEBサイトなどのツールを用いた啓発活動の実施可能性の調査、零細漁業組合でのワークショップの実施等を行う。

▼派遣期間 2014年3月～2016年3月

可能性を感じた地方の企業

乾燥地での農業では、節水は重要な課題。狩野さんは、地方の中小企業がアフリカで節水事業に取り組むことに興味をもち、協力隊から帰国後に鳥取再資源化研究所に自らアプローチして入社しました。

自社製品の発泡ガラス「ポーラスα」は廃ガラスのリサイクル製品で、軽くて、気泡がたくさん内在している小さな粒のような商品。この製品を土壌に混ぜると土壌自体の保水性が向上して、従来より少ない水の量で、野菜などの作物の栽培ができます。日本国内では他にも砂利や水質改善、悪臭対策等に活用されています。狩野さんは国際事業部に所属し、海外で発泡ガラスを普及させる業務に当たっています。

2016年11月にモロッコで開催された「第22回国連気候変動枠組み条約締約国会議(COP22)」では、ガラスリサイクル技術を活用した節水型農業技術のプロモーションを行いました。現在は、主に、同社が受託しているモロッコでの、JICA中小企業海外展開支援の普及実証事業を通じた、乾燥地農業技術の実証・普及プロジェクトに携わっています。「発泡ガラスの特性を生かし、気候変動で干ばつの深刻化が想定される地域で、持続可能な農地技術の普及と食料確保に貢献したい」と思いを語ります。



現地のコミュニティにも積極参加

大学時代はアルバイトで貯めたお金でバックパッカーをしていたという狩野さん。いつか途上国で生活や仕事をしてみたいという夢を抱いていました。大学卒業後は一般企業で働き、3年ほど経ったころ「本当に自分がやりたかったことは何だろう」と自身の人生を改めて考え直したとき、協力隊への挑戦を決めました。



(上) 研修では日本の水産加工物を紹介
(左) 派遣先で日本文化を紹介

モロッコでは、同僚と自己紹介を交わした後、お互いが「明日から何する?」からのスタート。配属先の水産普及センターでまず始めたのが、前職でWebサイトの制作等に従事していたスキルをいかし、センターのWebサイトや新聞など普及ツールの制作でした。少しずつ現地の人と関係性が生まれていき、日本の漁業システムを伝え、漁師を対象にした研修も行うようになりました。また、JICAが実践する、開発途上国が別の途上国を支援する南南協力を通じ、カメルーンなどから来た水産分野の研修員にモロッコ人同僚と協力して研修を実施しました。

協力隊1年目の後半から、JICAと配属先の許可をとって、地域の自治会に向き、学校に通えない子どもたちに向けて日本の文化等を伝え、ワークショップも実践。さらに、学校に行けなかったため読み書きができない女性に向け、生活に必要な算数を教えるなど、充実した日々を送る中で「日本人は読み書きができ、さまざまな情報を得られることがあたりまえ。だからこそ、将来の選択肢があって、さまざまなことにチャレンジできることは恵まれている」と実感したと言います。

発泡ガラスの現地生産に向けて

「今後は、まず現在取り組んでいるモロッコでの事業を確立させることが目標。そして発泡ガラスの現地生産に向け、課題や問題をクリアし、現地でのビジネスを成立させたい。これまでの出会いに感謝し、夢に向かってこれからも切磋琢磨していきたい」と狩野さん。協力隊員としてのモロッコでの経験を生かし、発泡ガラスの技術を応用し地球環境を改善して次世代に受け継いでいくことを目指す会社で、ともに成長していくことが夢です。



狩野さんは
こんな人!

鳥取再資源化研究所
代表取締役

竹内 義章さん



彼の「モロッコで節水技術を広めたい」という希望は、現在、私どもが行っているJICAの中小企業海外展開支援の普及実証事業の目標と合致しました。彼との出会いによって、モロッコでの事業化に新たな道が開けました。彼は明確な目的意識を持ち、目標達成に責任をもって行動しています。そういった姿勢は、協力隊での経験によるものだろうと感じています。

世界が近づいて視野が広がった
だからこそ身近な人に思いやりを



No.02

鳥取県立米子東高等学校
教諭

庄原 裕美さん

しょう ばら ゆ み

鳥取県出身。高校生のころ、カナダに移住した親戚に会い、英語に興味を持つ。外国語系の大学に進み、大学院では日本文化を専攻。鳥取県に戻って教員に。長期休暇を利用して海外ボランティアを経験。仕事を続けながら通信教育で日本語教師資格を取得し、現職教員特別参加制度で協力隊としてインドへ。帰国後、現職。

▼派遣国



インド

▼配属先

アルワチン インターナショナルスクール

▼職種

日本語教育

▼活動内容

小中高一貫の私立学校で、インド人日本語教師とともに日本語を指導。また日本文化の理解促進のためのイベントを企画、運営する。

▼派遣期間 2014年7月～2016年3月

社会人経験を積んで海外へ

鳥取県内でも有数の進学校である米子東高校で英語教諭を務める庄原さん。同校では台湾の中学校とお互いの学校を訪問し合う交流事業を毎年行っており、県が募集する留学生などの国際交流事業にも積極的に参加しています。海外に関心を持つ生徒が多く、「生徒から刺激を受けて、英語を活かして世界に貢献したいという気持ちを一層強くしました」とのこと。

庄原さんは教員として10年、これまで長期休暇を利用して海外ボランティアに参加してきました。協力隊の現職教員特別参加制度を知って日本語教師の資格を通信教育で取得し、協力隊としてインドのデリー市へ。「学生時代に海外に行くことも素晴らしいのですが、社会人経験を積んでから海外に行くのもおすすめ。学生の時とは違うことに気づくことができると思うんです」と、インドで感じたことを語ります。



インドでは昨日や明日よりも、今日

庄原さんが活動したのは、幼稚園から高等部まで約1,200人が学ぶ私立の学校。小学1年生で第3言語として日本語を選択した80人ほどの生徒に、現地の教員とともに授業に当たりました。日本語を実際に使うスキット（寸劇）やゲームを提案し、日本文化を伝える授業も。学校のある地域は外国人、日本人が珍しく、生徒たちは授業中でも「ゆみ先生！何？何？」と庄原さんに駆け寄ってくるほど興味津々。その元気さ、明るさ、素直さに触れ、「日本を世界に伝える意義は十分にあると感じました」と活動の目的を改めて感じたそうです。

インド生活で庄原さんがとても驚いたのが、ヒンディー語で昨日と明日を“カル”という同じ言葉で表現すること。今日だけは別の言葉があるそうです。赴任した当初は全く理解できなかったという庄原さんは、生活するうちに昨日や明日よりも、今日が大事という生き方を反映しているのではないかと感じたそう。「インド人は裕福ではない人がたくさんいて、今を生きること一生懸命。今は今しかないという考え方は、つらくてもうつむいている時間はないんだと、私を前に向かせてくれました」と言います。

教員の仕事はどこも同じ

インドも日本でも、生徒も先生も学校に毎日通います。「私が元気だと生徒も元気に答えてくれます。楽しくやるのが大事なんだと。日本とまったく同じです。だから、どこにいても心を込めて指導しようと思いました」。教員が果たす役割は世界のどこに行っても変わらないと気づいた瞬間、世界がぐっと小さく感じられたそう。そして世界の課題もぐっと身近に。「インドでの経験で世界が近くなり、視野が広がった」と言います。

「海外に行くことはものすごく特別なことで、自分が劇的に成長できるんじゃないかなと思っていました。でも、世界は日常の延長線上にあります。身の回りの人への思いやりを持った行動や言動は、世界の人に優しくすることにつながっています。日々の生活の中で、身近な人を大切にできることは、世界で活躍する人材の素質の一つだと思います」と力を込めます。



庄原さんは
こんな人！

鳥取県立米子東高等学校
教頭

内仲 弘さん



庄原先生は元気がよくいつも一生懸命で、チャレンジ精神の強い方。協力隊に行くとき、違和感はありませんでした。米子東高校は海外に興味を持つ生徒が多いので、庄原先生のインドでの経験を發揮していただき、生徒たちの異文化理解を促し、世界を見たいという動機づけにつなげてほしいと思っています。



子どもたちが主体的に学び 魂が躍るものをつかんでほしい

No.03

新田サドベリースクール
スタッフ

長谷 洋介さん
は せ よ う す け

東京都出身。鳥取大学農学部在学中に休学してイスラエルとヨルダンで生活。大学4年次には仲間と田畑付きの古民家を借りて田舎暮らしを始める。卒業後、協力隊でフィリピンに赴任。帰国後は鳥取での田舎生活を再開、以降県立高校の講師を6年間務める。2011年に智頭町へ移住、2014年「新田サドベリースクール」の立ち上げから関わり、現職。

▼派遣国



フィリピン

▼配属先

教育省イロイロ地域教育事務所

▼職種

理数科教師

▼活動内容

教員の指導技術向上を目指し、指導主事とともに、主に小学校の理科、中等教育の生物の授業の魅力向上に取り組む。また実験や観察の教材に関する講習にも協力する。

▼派遣期間 2007年6月～2009年6月

今知りたい、今やりたいに寄り添う場

鳥取県智頭町の森の中にある「新田サドベリースクール」で働く長谷さん。ここは自然が残る新田地区の森をフィールドに、6歳～18歳の子どもたちの自主性を尊重した教育を目指すデモクラティックスクールです。モデルとするのはテストや評価などのないアメリカのサドベリー・バレー・スクール。2014年、長谷さんは仲間と、土・日曜のみの活動をはじめましたが「週末だけの活動だと深みがない」と感じるようになり、2015年4月から月～土曜の毎日平日型の運営へ。教育理念の一つとして、“子どもたちの自主性・主体性を尊重し、「今やりたい」「今知りたい」に寄り添う”ことを掲げ、「生きたいように生きる力を持った子ども」や「自分で考えて解決していく力を持った子ども」らを目指しています。

スクールには決められた教科書や時間割はなく、長谷さんはスタッフとして子どもと過ごすことはもちろん、学校全体の運営のほか、山へ行って薪を切ったり、畑を耕したり米を作ったり。「畑作業などは子どもたちに強制はしません。子どもが「何しているの？」と自然と興味を持てば一緒に作業もしますし、質問にも答えます」



自分らしい生き方を求めて協力隊へ

「僕は以前から自給自足に興味がありましてし、お金を媒介して物やサービスを得るという世の中に違和感のようなものを感じていました」と長谷さん。共産体制のイスラエルのキブツで生活したり、バックパッカーで開発途上国を回っていたのだとか。「田舎に行けば行くほど、昔からの知恵を元に自然と共存している姿を感じられました」

大学時代に元協力隊員の話聞く機会があり興味を持ったものの、その中でよく言われていたのが「帰国後が大変」ということ。所属先に身分を残したまま参加する「現職教員特別参加制度」があることを知り、教員採用試験を受けますが、協力隊も同時に合格。熟慮の上、協力隊としてフィリピンへ赴くことに。

フィリピンでは教壇に立つのではなく、先生の指導が主な仕事。夜間学校のボランティアなど、日本語を習いたいという子どもたちがいれば教える日々。「身の丈にあったできることを愚直に積み重ねていた日々でした」と振り返ります。



(上) 島の学校で生徒たちと
(左) 夜間学校でも理科を教える

海外で多様な価値観を目の当たりに

帰国後は縁あって、県立高校の講師を務めることに。「先生は生徒たちの学習へのモチベーションを上げようと一生懸命ですが、生徒たちの学習意欲はなかなか上がらない。でも休憩時間はとても楽しそうにしている。学習意欲を高めるにはどうすればいいのか、葛藤する毎日でした」。そんな中、智頭町で新田サドベリースクールの母体となる『森のようちえんまるたんぼう』の自然を生かした保育・教育を知り、子どもたちの育つ環境を小学校以降も持続させて欲しいと願う保護者達の思いを受けとめる形で、勉強会などを経て、スクールの発足から関わってきました。

「協力隊を含め、途上国を見てきた中で多様な価値観を目の当たりにしてきました。“こうじゃなきゃいけない”というのではなく、“これもあるし、あれもある”という生き方もいいのではないのでしょうか。自分で魂が躍るようなものを掴みとっていけるような人材がここから育っていったら良いと思います」



長谷さんは
こんな人！

新田サドベリースクール
スタッフ
佐藤 陽子さん



海外とリわけ開発途上国を実際に多く見聞きされ、さらに協力隊でのさまざまな活動を行ってきたという背景をお聞きしていたので、長谷さんは何があっても動じないというのは感じますね。あまり面白くない、面倒な仕事でも決してイヤだとは言われません。それはいろんな文化や人と関わる中で苦労しながら、培われてきたものだと思います。



アフリカンミュージックで 日本を元気にしていきたい

No.04

ギニア音楽演奏者

ジュバテ 麻子さん

じゅ ば て あ さ こ

鳥取県出身。小学生のとき、アフリカを舞台にしたテレビ番組を見てアフリカに興味を持つ。大学卒業後、岡山県内で英語教師を経て、協力隊に応募。帰国後、ギニア出身のジャンベ奏者、アラマ・ジュバテさんと結婚。現在は高校で英語の講師を務めるかたわら、「アラマジュバテファミリー」として各地の学校等へ赴き家族で演奏活動を行っている。

▼派遣国



ジンバブエ

▼配属先

高等教育・技術者マプフル自助専門校

▼職種

青少年活動

▼活動内容

生徒たちのレクリエーションの場として、スポーツを中心とした活動の運営・企画等を担当。また小学校でバレーボールやインディアカなどの指導、スポーツフェスティバル等のイベントも担当。

▼派遣期間 2000年4月～2002年4月

家族で太鼓のリズムにのって

ジュバテさんは現在、ギニアの民族音楽伝承者のアラマ・ジュバテさんと結婚し、鳥取県を拠点に活動しています。アラマさんは日本でも各地で演奏活動を行っています。4人のお子さんの母親でもあるジュバテさんは、平日は地元の高校で英語の講師を務めるかたわら、ご主人とともに鳥取県内を中心に幼稚園や小学校、養護施設や福祉施設、地域の行事などへ出向き、アフリカ民族音楽の演奏活動を行っています。「アフリカの音楽には、人の心を動かす不思議な力があるようです。ジャンベというアフリカの太鼓を演奏すると、みなさん食い入るように見てくれますし、自然とリズムにのってダンスを始めるお子さんもいます。実際に太鼓をたたいてもらうと、とても盛り上がります」

ジュバテさんは協力隊から帰国後、2年間ほどデスクワークの仕事に従事していました。じっとしていられない性分で、「もう一度アフリカに行ってみたい」「これまでの経験をいかしたい」と悶々とした日々を過ごしていたそう。そんなとき、アフリカンミュージックに再会。「久しぶりに聴いて、感動で涙が止まらなかったのを覚えています」。音楽を聴くだけでなく、民族楽器を習いにアフリカへ行くほどのめり込んでいったジュバテさん。その後、ご主人と出会い、彼を日本へ呼び寄せたのだとか。最近では、演奏活動にお子さんも加わり、「アラマジュバテファミリー」としてアフリカ音楽の魅力を伝えています。



ご主人との演奏風景

エネルギッシュなアフリカを体感

協力隊では、かねてから行きたかったアフリカへ。仕事場へは炎天下のときも大雨のときも、悪路をマウンテンバイクで1時間以上かけて通っていたそうで、「限られた道具を使い、子どもたちとバレーボールなどの練習をしました。若かったから何でもできたのかも。水分補給はお茶では間に合わず、いつも炭酸飲料をがぶ飲みしていましたね」。ジュバテさんはスポーツを通じてジンバブエの現地の人と触れ合う中、彼らのエネルギッシュな魅力に惹きつけられたのだとか。「アフリカは援助を必要としている国が多く、“貧しい”“恵まれない”“暗い”といったマイナスイメージを抱くと思います。しかし、彼らはたくましく、実に明るい。その象徴として音楽があるのです」。アフリカ音楽に心動かされた理由に気づいた瞬間です。

アフリカの文化を広く伝えたい

「自分たちと違う文化に触れることで、視界はどんどん広がります。とくに若い方やお子さんに、“日本からとても遠いアフリカにも素晴らしい音楽の文化をもつ国がある”ということを知ってもらい、アフリカを身近に感じてほしいですね」とジュバテさん。さまざまな楽器の音色、ダンス、歌を心と体で感じて体験し、楽しむことで音楽の魅力を伝え、表現することの素晴らしさを子どもたちに伝える活動が続ける中で、演奏後に「元気が出たよ」「楽しかった」といった言葉をもらえると、やりがいを感じるそう。今後も音楽を通してアフリカの魅力を日本の人たちに伝え、日本を元気にしていきたいそうです。

「主人は基本的に物静かですが、演奏活動など日本で活動する上でさまざまな問題が起こります。そんなとき私に、“できないと思ったらできない、できると思ったらできる”と強く言います。そんなとても前向きな主人に背中を押してもらいながら、私も前を向いていきたいです」



ご主人との演奏風景



世界を変えてきたのはいつの時代も、たったひとりの強い想いだ

青年海外協力隊は現地の人びとと同じ言葉を話し、

ともに生活・協働しながら開発途上国の国づくりのために活動しています。

1965年に開始され、これまでに91か国に44,000名以上を派遣しました。

JICA中国

〒739-0046 東広島市鏡山3-3-1

TEL:082-421-6300(代表)

FAX:082-420-8082

URL: <https://www.jica.go.jp/chugoku/>

JICA海外協力隊

Q 検索

独立行政法人 国際協力機構 中国センター